

グライスの環境とグライスの外

高橋速巳

株式会社カシェウエブレト

Caché et Wavelet, Inc.

hayami.takahashi@cachewavelet.jp

概要

グライス (1913 - 1988) がウィリアム・ジェームス記念講義を行った 1967 年に公にされた「序論」には、かつての「戒め」は「意味と使用は同じもの的心得よ」であり今は「意味と使用を混同しないよう注意すべし」という「戒め」へと変わり「手軽な哲学の常套句」になりかけていると書かれてある。

意味使用説へのグライスの姿勢を概観する前の準備として、グライスの環境と幾つかの用語の把握を試みる。特に「効果 (effect)」という語に関心を払った。「効果」という語は、グライスの特色であるとともに、グライスの外に出ることも誘引する用語であると思われる。

なお著名な「会話の格率」は本稿に関心を持つ「無時間的意味を発話者の意図から説明する」箇所に直接には現れないため割愛した。

1 グライスの環境

オースティン (1911 - 1960) は Saturday Morning という集いを学期期間中の毎土曜日に開催しており、この集まりにグライスは初めから参加していた [1]。毎回 2、3 時間のもので、1940 年代後半に始まったものだった。参加者にはストローソン (1919 - 2006) もいた。ストローソンとの出会いは、グライスがセント・ジョーンズ・カレッジで論理学を学部生のストローソンに指導した頃で、親交は長きに渡った。

ストローソン グライスの考えを追う上で、親交を結んでいたストローソンの意見は、その所説の発表年も関心事になる。1950 年に「指示について」[2]の中で、ストローソンは下の記述を行っている、

「表現の意味は、特定の機会に、その表現を使用して指示される対象と同一視することはできない。文の意味は、特定の機会に、それを使用して行われる主張と同一視することはできない。

なぜなら、表現あるいは文の意味に関して語ることは、特定の機会におけるそれらの使用に関して語るのではなく、指示を行うための、あるいは主張を行うための、すべての機会におけるそれらの正しい使用を律する規則・習慣・規約などに関して語ることだからである。」

1964 年にストローソンは、「Intention and Convention in Speech Acts」[3]の中で、1962 年のオースティン「How to Do Things with Words」[4] (邦訳 [5].) の「発語内行為は慣習的行為である」という所説を批判した。

ストローソンのこの批判は、グライスが 1967 年の「序論」[6]で述べている次の記述に類似している。

「私の印象では、サールは (オースティンのように) 発語内的な種類の言語行為のことを慣習的な行為だと考えており、,,,,,,、一部の言語行為 (約束や誓いや結婚の承諾のような) は右に大まかに述べた [強い] いみでの慣習的な行為であるだろうし、また明らかに、発言することは何らかのいみでの慣習的行為である (なぜならそこには言語的装置の使用が伴い、それらの装置は何らかのいみで慣習的な) ことから、しかし、はたして発言するというような慎ましい行為が、右に述べたかなり強いいみでの慣習的行為なのかどうか、私は疑わしいと思う。」

グライスのこの記述の「そこには言語的装置の使用が伴い、それらの装置は何らかのいみで慣習的な) ことから」という箇所において見られる断り書きは、ストローソンの以下のものに相当すると思われる。「First, we may agree (or not dispute) that any speech act is, as such, at least in part a conventional act. The performance of any speech[原文は斜字] act involves at least the observance or exploitation of some linguistic[原文は斜字] conventions, and every illocutionary act is a speech act. But it is absolutely clear that this is not the point that Austin is making in declaring the illocutionary act to be a conventional act.」

オースティンと日常言語 「「回顧的あとがき」より」[7]には次のように書かれている。「歴史上の事実の問題として、オースティンはG・E・ムーアへの強い称賛を公言していた。彼はこう言ったことがある。「ウィトゲンシュタインを好む人もいるが、私が惚れ込んでいるのはムーアだ」「明らかにオースティンは、日常言語を微妙ですばらくよくできた道具だと考え、それは無益な見せびらかしのためにではなく、真剣な（また真剣でない）使用のために作られているものだと考えていた。だから、誤り得ない保証はないけれども、もしも日常の話し方の中に隠された誤りを見つけだそうというのであれば、それを誤りだとすべきしかりとした理由がなくてはならない。」

2 「発話者の意図」を礎とみなす

「発話者の意味と意図」（邦訳第五章）[8]で、「無時間的意味と適用された無時間的意味は、どちらも発話者の場面意味（と他の諸概念）に基づいて説明可能であり、だから究極的には発話者の意図に基づいて説明可能だ」と述べられている「説明」は「発話者の意味・文の意味・語の意味」（邦訳第六章）[9]で行われている。この「説明」は、「大規模な計画」とも言い換えられており、六段階からなる。この計画は、「言った事柄（what the speaker has said）[10]」と「含み（たとえば、含意した、ほのめかした、示唆した）とした事柄（what the speaker has implicated(e.g. implied, indicated, suggested)）[10]」との区別から生じたものであるとされる。

その段階三は、「発話タイプの慣習的意味という概念を解明する試み」であるとされている。

個人方言 段階三で、「個人方言」と「L（言語）」というように分けて、まず「個人方言」から見てゆくというような「順序」が、グライスの考えにある。「個人方言」の資格を持つとされる「ある特定の手振り」から説明を始めている。

3 1948年に成立していた考え

グライスの「Studies in the Way of Words」(1989)[10]は、グライス自身によって編まれ、二部構成になっており、第一部は1967年に行ったウィリアム・ジェームズ記念講義にあてられている[11]。邦訳には、第一部の全部（邦訳の第一章から第七章）と第二部からの三篇（邦訳の第八章から第十章）が収められている。

論考「意味」[12]は、八番目に来ているが、1948年に書き上げられ、ストローソン夫婦の助けを経て1957年に公にされたとされる[1]。論考「意味」の骨子は、1968年の「発話者の意味・文の意味・語の意味」[9]の中で、無時間的意味を発話者の意図から説明しようとする際、1957年の形へ微修正を加えた上で、説明の核となる「場面意味」というものへ定義を与えている。

非自然的意味と引用符 論考「意味」[12]では、自然的意味と非自然的意味とを区別し、自然的意味は「引用符で括られた文や句の後ろに動詞「意味する（という意味だ）」を置く形での言い換えができない」とする。「発話者の意味と意図」[8]では、Appendixで示した意味特定の四分類において（1）（3）までその引用符が付いている。

さらに「発話者の意味・文の意味・語の意味」[9]では、意味特定の四分類の（1）と（4）の引用符の有無について、（4）は「意味が」「引用符」「を使わずに」「特定される」が（1）は「文や語句の意味が」「引用符」「の助けを借りて」「特定される」とある。

4 効果

「効果」という語は、次のような使われ方をしている。

「Aが何を意味したかを問うことは、意図された効果を特定するよう求めることにほかならない。」[12]「xの発話において意図された効果・反応を特定すれば、xを発話することでUが何を意味したか、という問いに答えるための素材が与えられる。」[8]

また、場面意味（Appendix）でない無時間的意味においても、発話主体を「人々（漠然とした）」として、「効果」というものが言われている[12]。

5 受け手

グライスが取り扱う「意味」というものは、いつでも成立するわけではない。

「Uはxを発話することで何ごとかを（非自然的に）意味した」は「受け手Aに関して、Uは彼の発話xがAにある効果（反応）Eを生じさせることを意図し、しかもAがその意図を認識することによってAに効果Eが生じることを意図していた」ということであるとされる[9]。

入れ子のような様子にあるため、仮の記号で表してみる。

発話者 U の x の発話の様子を U_x とする。受け手 A に E が生じている様子を $A(E)$ とする。

U の発話 x が、A にある効果 (反応) E を生じさせるという条件的因果的つながり部分を \rightarrow で表し $U_x \rightarrow A(E)$ とする。

U がそのことを意図している様子を $U[U_x \rightarrow A(E)]$ とする。以下同様に図を作ると

$U[A[U[U_x \rightarrow A(E)]] \rightarrow A(E)]$
と書くことができるだろう。

シッファーの事例 U は名うての守銭奴 A と一緒に部屋にいて、A に出て行ってもらいたいと思い、A から良く見えるところで、五ポンド紙幣を窓から外に落とすという話である。

この事例では、 $U[A[U[U_x \rightarrow A(E)]] \rightarrow A(E)]$ という図において、 $U[A[$ の追加を検討しなくてはならなくなるとされる。

背進が問題になるとして、推論要素というものを設けて対処を試みている。

6 意味の特定

グライスにおいては、「意味」とは或る程度「特定」されうるものである。論考「意味」[12]では、「「・・・という信念」というような「という」節からなる単純な解答がつねに可能なわけではない」と述べている。意味の特定の事例として Appendix で示したのものがある。

7 発話後の実際の効果

発話の後の実際の結果・効果というものは客観的な性格を帯び、その発話を知る人々の心象にも直に現れてくるようなものである。

U が発話を「行くかどうか」という点に着目してみる。

グライスの定義に則った上で、発話を行わないのではなく行うに至るためには、 $U[A[U[U_x \rightarrow A(E)]] \rightarrow A(E)]$ という様子が存在することが出発点にまづ必要ではないだろうか。この図の段階と、発話の実行とが、時間的に重ならず発話の実行の方が後に来るとすることには疑義を持つ人もあろうが、ここでは暫定で、実際の発話は後にあるとして、

$U[A[U[U_x \rightarrow A(E)]] \rightarrow A(E)] \rightarrow U_x$
と表すことにする。その後、 $A[U[U_x \rightarrow A(E)]]$ が来て、さらにその後に、 $A(E)$ が来ると言うことができそうだ。これをつなげると下のようになる。

$U[A[U[U_x \rightarrow A(E)]] \rightarrow A(E)] \rightarrow U_x$

$\rightarrow A[U[U_x \rightarrow A(E)]] \rightarrow A(E)$

記号で表したものの上では、一番最後尾の $A(E)$ が発話後の実際の効果とみなせる。

8 「効果」という概念の地平

グライスの定義外の効果 グライスの定義を外れるような「効果」というものを考察する。「発話をきっかけとした効果」である点で、約束等と同じだが、グライスの定義からは外れるものがあるように思われる。グライスの定義を外れるものとしては背進問題に触れたが、ここでは別種の事柄として扱う。発話をきっかけとして、それに触れた人に、「効果」が生じると想定される事象を下に挙げた。

(ア) その場に別の聞き手 C が居合わせたとすると C (E2) というものも実在すると言うことができるだろうか。仮に、U に知られずに、ついたての向こうに C が居る情景を考えてみる。その場合を図に表してみれば下のようになるだろうか。

$U[A[U[U_x \rightarrow A(E)]] \rightarrow A(E)] \rightarrow U_x$
 $\rightarrow C[U[U_x \rightarrow A(E)]] \rightarrow C(E2)$

(イ) 小説家と読者 D という二者を思い浮かべてみることにする。一人の小説家は目下読者を得てはいないが、読者が現れれば、その人の心象に或る様態を生ぜしめたいと望んでいるとする。そして、小説家はこう書けば読んだ人はこう感じるだろうと記してゆく。

この想定は「受け手がいない場合の発話者の場面意味」[8]のケース (a) 日記あるいは (c) 内言に該当するようにも思われる。

(ウ) 自動筆記のシュルレアリストと読者 F という二者を思い浮かべてみる。一人のシュルレアリストは産まれてからこのかた、自分の書いたものをきっかけにして自分以外の誰かの心象へ或る様態を生ぜしめたいなどといったことへ無頓着だったが、その紙片は当人の死後、読者 F を得るに至った。

C (E2)、D (E3)、F (E4) は、発話をきっかけに生じたものである。

オースティンの「効果」という語 オースティンの用語を概観する [5]。

「意味 (meaning) をもつ発語行為 (その中には、音声行為、用語行為、意味行為がある)、何ごとかを言いつつある一定の力を示す発語内行為、何ごとかを言うことによってある一定の効果達成する発語媒介行為の三者を区別した。」

「発語内行為は、発語媒介行為から区別しなければ

ばならない。」

「われわれの行なう行為（ここでは発語内行為）とそれがもたらす諸々の結果との間に一線を書きなければならないのである。」

「われわれは、Bの行為（発語内行為）とCの行為（発語媒介行為）との両方に言及する時に、「Bを行なうことについて、Cを行なった。」と言うであろう。このことが、Cの行為を発語内行為と区別して発語媒介行為と呼ぶ所以である。」

「発語媒介行為は、「私は、xを行うことによって、yを行っている」という場合のように、つねに何らかの意味での結果を含んでいる。この場合、われわれはつねにある範囲の「結果」を発生させているのであるが、そのうちのあるものが「意図的でない」ものである場合がある。」

「発言の力 (force) すなわち、「(以下で明らかにするある一つの意味において) どのようなものとして、その発言が受け取られるべきであるか」ということ」

「私としては意味 (sense) と言及対象 (reference) とを合わせたものに等しいという形で説明される意味 (meaning) というものと力 (force) とを、まさにこの意味 (meaning) の内部で意味 (sense) と言及対象 (reference) の区別が本質的であると同程度に、明瞭に区別したいと思うのである。」

「ある一定の効果が達成されないうぎり、発語内行為は適切に遂行されることなく、また、遂行に成功したということにもならない。しかし、このことは、発語内行為がある一定の効果を達成することであると述べることは異なる。たとえば、聞き手が私の言うことを聞き、そして私の言うことを何らかの意味に了解したのではないならば、私がその人に警告したと言うことはできない。この発語内行為が遂行されるためには聞き手の側において何らかの効果が達成されなければならない。このような場合、効果なるものをいかなる形で述べるのが最善であろうか。また、この効果をいかなる範囲のものに限定すべきであろうか。一般的に言って、この効果なるものは、発語の意味 (meaning) と力 (force) とに関する理解を生じさせることに等しい。したがって、発語内行為の遂行には、了解の獲得 (securing of uptake) が必要である。」

発話の直接の目標 uptake が直接の目標であるという下の意見を記号で表してみる。

「ストローソンやサール、ジャック夫人から寄せられた最も一般的な苦情は、私が完全にであれ部分的にであれ、伝達において意図されて (M意図されて) いる効果を取り違えている、というものだと思うられる。私によれば、意図されている効果は何からの形の受諾 (たとえば信念や欲求) であるが、本来ならばそれは理解、把握、あるいは (オースティンの言い方を使うと) 「了解 (uptake)」なのだ、というわけである。非難の一つの形態 (より極端なほうの形態) は、《あれこれの形の受諾が裏の目標になることはあるにしろ、直接に意図された目標はつねに「了解」だ》と主張するものであろう。」 [6]

図に書いてみると

$$U[A[U[Ux \rightarrow A(\text{uptake})]] \rightarrow A(\text{uptake})] \rightarrow Ux \\ \rightarrow A[U[U[Ux \rightarrow A(\text{uptake})]] \rightarrow A(\text{uptake})]$$

というようなものになるだろうか。

9 他の概念の接続可能性

グライスの概念が、グライスにとって構想外のシステムと関りを結ぶことは想定される。一部の所説が類似するオースティンについては、ドゥルーズとガタリが取り入れ [13]、日常言語学派とは異なった様子で掘削している。グライスは [13] が取り入れた他の言語理論とも繋がりうる。ここには、システム間の語の輸入 (移植、接ぎ木) [14] という一般的理論枠組みが現れる。グライスの概念を切り出しブロックとし、他の理論との間の独立性に応じ、幾つかバージョンを設けることは考えられる。

10 おわりに

グライスはストローソンやオースティンの近くで研究していたが、所説にも一部類似性が見られる。

グライスは発話の意図を意味の礎に置く。意味は特定することができて、それは「意図された効果」だとされる。効果の特定においては、「「・・・という信念」というような「という」節からなる単純な解答がつねに可能なわけではない」ともしている。では、その単純ではない部分とは何だろうか。これは「効果」というものの性格と関りを持たないだろうか。このことについては、オースティンやストローソンも併せて、「効果」「力」というものの周辺を調べたい。

本稿の調査は、モニタージュのロジックの構築においての操作に関わる概念「効果」の根拠を探索する中で行われた。

参考文献

- [1] 三木那由他. 「グライス 理性の哲学」. 勁草書房, 2022.
- [2] ピーター・フレデリック・ストローソン. 「指示について」(原文 1950)「現代哲学基本論文集 2」に所収. 勁草書房, 1987.
- [3] P. F. Strawson. 「Intention and Convention in Speech Acts」. *The Philosophical Review*, Vol. 73, No. 4, 1964.
- [4] J. L. Austin. 「How to Do Things with Words」. Harvard University Press, 1962.
- [5] ジョン・ラングショー・オースティン. 「言語と行為」. 大修館書店, 1978.
- [6] ポール・グライス. 「序論」(原文 1967)「論理と会話」に所収 第一章. 勁草書房, 1998.
- [7] ポール・グライス. 「回顧的あとがき」より」(原文 1987)「論理と会話」に所収 第十一章. 勁草書房, 1998.
- [8] ポール・グライス. 「発話者の意味と意図」(原文 1969)「論理と会話」に所収 第五章. 勁草書房, 1998.
- [9] ポール・グライス. 「発話者の意味・文の意味・語の意味」(原文 1968)「論理と会話」に所収 第六章. 勁草書房, 1998.
- [10] Paul Grice. 「Studies in the Way of Words」. Harvard University Press, 1989.
- [11] 飯田隆. 「解説 グライス紹介」「論理と会話」に所収. 勁草書房, 1998.
- [12] ポール・グライス. 「意味」(原文の草稿 1948 公開 1957)「論理と会話」に所収 第八章. 勁草書房, 1998.
- [13] ジル・ドゥルーズ フェリックス・ガタリ. 「千のプラトール」. 河出書房新社, 1994.
- [14] 高橋速巳. 「混合物の強さの度合」. 言語処理学会 第 31 回 年次大会 (予定), 2025.

A 「言った事柄」と「含みとした事柄」

この2つの区別を、グライスが出している具体例「ビルは哲学者であり、だから勇敢である。(S1)」において眺めてみる。グライスにおいて、「言ったこと (what is said)[10]」あるいは「what the speaker has said」[10]とは「ビルが哲学者でありしかもビルに勇気がある」ということであるとされ、「話し手がほのめかした (indicate)[10] こと」あるいは「what the speaker has implicated(e.g. implied, indicated, suggested)」[10]は「ビルに勇気があることがビルが哲学者であることからの帰結である」ということであるとされている。

また、この例について、S1の「無時間的な意味」を「完全に」「特定」したものととして次の記述がある。「S1の一つの意味の中には「ビルは哲学研究の職に就いている」ということと「ビルは勇敢だ」ということ、及び「ビルが勇敢であることは、ビルが哲学研究の職についていることからの帰結である」ということが、含まれており、それ以外のことは何も含まれていない。」この記述から、「無時間的な意味」と「言ったこと」「含み」との間の包含関係が読み取れる。

この具体例を見ると、グライスにおいて「言った」という語の使われ方は特殊であるように思われる。そのため「含み」の解釈にも注意する必要があるが、この例からは「含み」とは推論の一種ではないかという解釈がありうるだろう。

「what the speaker has implicated[10]」である「implicature」を、三木は「含み」ではなく「推意」と訳しているが、この語についてのレヴィンソンやレカナティの記述に「推論」という要素を見ることができ[1]。

また、「話し手が含みとした事柄は、慣習的に含みとされた事柄(用いられた語句の意味によって含みとされた事柄)である場合もあれば、非慣習的に含みとされた事柄(この場合には含みの特定は使用された語句の意味を特定する仕事の範囲外である)である場合もある。」[9]とされる。

B 場面意味と意味特定四形態

場面意味とはどういうものだろうか。「発話者の意味と意図」[8]の「意味を特定する四形態」の中に以下のように現れている。

「意味特定の主要な四つの形態を区別することが

できる。

(1)「x(発話タイプ)は『…』という意味だ」(完全[1a]もしくは不完全[1b]な発話タイプに関する無時間的意味の特定)

(2)「x(発話タイプ)はここでは『…』という意味だ」

(完全[2a]もしくは不完全[2b]な発話タイプに関する適用された無時間的意味の特定)

(3)「Uがx(発話タイプ)によって意味したのは『…』ということだ」

(発話タイプの場面意味の特定)

(4)「Uはxを発話することで…ということの意味した」

(発話者の場面意味の特定)

もちろん、これら四つの言語形態の区別には立法行為めいたところがあり、実際の意味特定はここに便宜的に区別したほど整然と分かれてはいない。」

上記の(1)から(4)は「意味を特定する言い回し」というものである。

例えばこのうちの(4)「Uはxを発話することで…ということの意味した」(発話者の場面意味の特定)と述べられている中の、(発話者の場面意味の特定)の箇所は、(発話者の場面意味を特定する言い回し)とも言い換えられており、こちらの方がグライスの考えにより沿った書き方であると思われる。

意味特定の4つの分類をみると、「場面意味」とされるものには、「Uが」「Uは」という部分が冒頭にあり、発話者が明記されている。

このように場面意味は「発話タイプの場面意味」と「発話者の場面意味」とに分けられているが、その4分類の記述の直後、「第六章(「発話者の意味・文の意味・語の意味」[9])では区別していない」とも書かれている。

「発話者の意味・文の意味・語の意味」[9]で、(3)(4)を区別せずに、場面意味を捉えた上で、(2)との混同に注意を促した記述がある。

C 個人方言

個人方言から始めるという「順序」は、グライスを離れて、「発生」や「発生の原理の説明」あるいは「権利上」そして「先験的(超越論的)」といった理論的一般枠へ関わるに至るだろうか。